

共同研究のきっかけと、受賞への喜び

鼎談

島本● 本日はお集まりいただきありがとうございます。まずは一成さん、杉本先生、この度の書籍・論文のご受賞、本当におめでとうございます。今回の受賞は、ただ研究が優れていたというだけでなく、研究機構の共同研究を通じて、杉本先生の実践と一成さんの理論が重なり合い、そこから「湧き出たもの」「発酵したもの」が評価されたという点が、私たちにとっても本当に嬉しいことでした。なぜこの書籍や論文が評価されたのか、その背景を紐解きながら、「こういうところが評価されたのだ」という部分をわかりやすく伝えられればと思っています。

山本● ありがとうございます。受賞した書籍と論文の内容は、研究機構の委託研究「Life（生活・人生・生命）」を深める保育実践理論の探求」がもとになっています。この研究は、研究企画委員会の室田先生（当時、機構代表）が杉本先生を紹介くださったことで始まりました。研究機構がなければ生まれなかった書籍、論文です。なので、本当に感謝しています。

島本● なるほど。杉本先生は、一成さんと研究して一番感じたことは何ですか。

杉本● 僕はもう「めちゃくちゃラッキー、大ラッキー！」と思っています。私たちの法人

山本一成氏（滋賀大学准教授）

「日本保育学会保育学文献賞」と「日本保育学会研究奨励賞（論文部門）」の受賞を祝して

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会外部委員であり、滋賀大学准教授の山本一成氏が執筆された文献が、（一社）日本保育学会の2026年「日本保育学会保育学文献賞」と「日本保育学会研究奨励賞（論文部門）」を受賞されました。

この受賞を祝して、鼎談を開催しました。

出席者（敬称略）

山本一成

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会外部委員、滋賀大学准教授

杉本一久

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員、京都府・社会福祉法人宇治福祉園理事長

〔進行〕

島本一男

保育・子育て総合研究機構代表、東京都・諏訪保育園園長



山本一成氏

は、もともと障害のあるお子さんを受け入れる土壌があり、ずっと「命を大事にする保育」を実践してきました。「保育者は言語化がうまくない」と言われることもありましたが、何でもかんでも言葉にしようとして、失われてしまう大切な価値もたくさんあると思うんです。個人的には、実習生の実習簿や保育の記録も、「本当に難しい」と思うくらい。だから、一成さんが持ってきてくれた視点や観点は、僕にとって「失われそうなのを守りながら、新しく捉え直す」ための、新しい栄養になりました。

身体に流れる 幼児期の感覚と土壌

島本● お二人が初めて会った時に一成さんの幼少期の話を聞き、杉本先生が「ビビッときた」と伺いました。

杉本● そうなんです。「どこの保育園の出身ですか？」と聞いたたら、「さくらさくらんぼ保育園」（創始者…斎藤公子氏）だと。それを聞いて

て「ああ、なるほど！」と腑に落ちました。

山本●実は本のあとがきにも、博士課程の指導教員であった矢野智司先生ともう一人、斎藤公子先生のことを書いています。子どもながらに園での「楽しかった記憶」と「頑張った記憶」が身体に刻まれていきます。研究者になって「お（生活・人生・生命）」について書くようになった時、自分の身体に流れる感覚のベースが幼児期の「いのち」の体験にあると気づきました。「さくらさくらんぼ保育園」では、例えば解剖学者の三木成夫さんから「動物と人間の連続性」について学び、そこからリズム遊びをつくるなど、「いのち」を原点にした保育をしています。その土壌があったからこそ、杉本先生の園の保育を見た時に哲学の概念を自分の身体で消化して、「生きているものどうしの想像力」や「共通感覚のブリコラージュ」といった新しい言葉を紡ぎ出すことができたのだと思います。

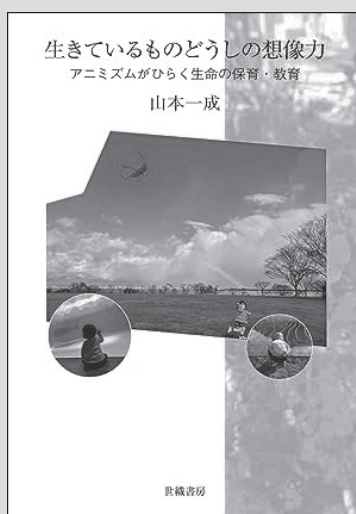
杉本●僕もずっと「子どもたちは、人類の古代を生き直し、体験している」という感覚を持つ



杉本一久氏

2026年 日本保育学会保育学文献賞

『生きているものどうしの想像力—アニミズムがひらく生命の保育・教育』（世織書房、2025年）
2026年 日本保育学会研究奨励賞（論文部門）
「中村雄二郎の共通感覚論による遊びの深まりの概念化—共通感覚のブリコラージュの視点から—」（『保育学研究』第63巻第2号、2025年）



ていました。言葉になる以前の、感覚が敏感な時期の体験をじっくり味わってほしい。言葉を持たない0歳児や障害のある子どもたちも、実はものすごく豊かな感情体験をしています。文字以前の「象形文字」のようなグルグル描きをする2歳児の姿を大切にすることと、一成さんの持つ「動物と人間の連続性」という思想は、間違いなく深く響き合っていましたね。

「言語化による発酵」と 現場に起きた変化

島本●「言語化すると失うものがある」という

危惧を、一成さんが間に入ることで、むしろ「湧き出すもの（発酵）」へと変えていったのですね。一成さん、そのあたりの言葉選びのこだわりはありますか？

山本●研究機構の報告書では「ひびくまざるわきだす」という言葉を使いました。これは教育学者の大田堯先生の「ちがうかわるかわる」という概念や、矢野智司先生の思想からインスピレーションを受けています。ただ、教育哲学の概念をそのまま現場に当てはめてしまうと、現場で起こっている生々しい事実の意味を既存の理論の中に押し込めてしまう気がしたんです。

だから、杉本先生の園から入ってくる膨大な情報を、一度自分の身体に通して、自分の言葉として語り直したいと思いました。それを園の先生方に返した時、「面白い！」とフィードバックをいただいたことで、あの報告書や論文が完成しました。

島本●言葉から実践のイメージがさらに広が



島本一男氏

る。まさに保育の専門性の核心ですね。杉本先生、一成さんの言葉が入ることで、園にはどんな変化がありましたか？

杉本●今まで自分たちがやってきた実践を「違う言葉で語ることができるようになった」ことが大きいです。僕は保護者会などで、写真を見せながら保育の意図を話すのですが、一成さんからフィードバックされた言葉が面白くて、すぐに真似して使い始めちゃいました。それが僕だけでなく職員全体にも混ざり合っていた。大げさに言えば、「保育の魅力を、生命の次元により戻す」きっかけになりました。「命を大事にする」という言葉の深みが、さらに増した感覚です。

山本●私が「こういうことかもしれません」と少しお話しすると、次の週には現場でものすごく面白い実践として展開されているんですよ。受賞論文でも「共通感覚のブリコラージュ」という言葉を使ったのですが、これをお伝えした直後、杉本先生が「これは『熱中過程ゴールドブレンド』だね」とコーヒーマシンのダジャレを交えて表現してくださって。

でも、子どもたちが熱中する過程が混ざり合っている、キラキラ輝く姿は、まさに「ブリコラージュ（混ざり合いと生成）」そのものでした。先生方との言葉のかけ合いの創造性が本当に面白かったですね。

「発達」と「生成」の両立、そして内臓感覚

山本●今の教育界は、成果やエビデンスが見えやすいよう、能力や言語を「細分化」して育てる方向にいきがちです。しかし一成さんのアプローチは、それらを統合した「人間になつていくプロセス」そのものを面白がっている。今のトレンドとは逆の、本質的な方向を指し示しているように思えます。

山本●教育学でも細分化への批判はありますが、私は矢野智司先生もおっしゃるように「発達」と「生成」の両立が大事だと考えています。

「発達」が人間として能力を高めていく方向なら、「生成」はむしろ動物的に体験や遊びに没頭して深めていく方向です。今は後者の「深める」場所が足りなくなっています。

例えば深さを語る言葉として、哲学者の中村雄二郎さんの「共通感覚」という概念があります。これは五感を超えた感覚を指していて、想像力や記憶を込みにして感じられる感覚のことです。この感覚の深さというのは、保育にとっても大切なことで、例えば倉橋惣三は、子どもは象の鼻をただの「長さ」として感じるのではなく、「鼻が振られる時のブーンという動きの感覚も含んだ長さ」として体験していると書いています。子どもが動物になりきって遊ぶ時、このような共通感覚が内側から湧き出て、遊び

の中で混ざり合い、体験が深まっていくのです。こうした土台にある「感覚」を豊かにすることが、結果として、その後に小学校などで知識や技術を得る学びの可能性を広げることにもつながる。だからこそ、両者はつながっているし、両立するものなのです。

杉本●その「内側から湧き出る感じ」、めちゃくちゃわかります。外側から見ると「多感覚統合」という環境へのマッチングに見えるものが、子どもの内側では「共通感覚のブリコラージュ」として湧き出ている。

山本●研究機構で研究を委託している脳科学者の田中友香理先生が「もしAIに人間のような感情を持たせようとしたら、ロボットの中に膨大な『内臓感覚（腹の底から笑う、腹が立つなどの感覚）』を入れ込まなければならず、莫大なコストがかかる」と言われていました。人間の身体や感覚って、それほど優秀で、本来ないがしろにしてはいけないものですよ。

ミクロな保育と

マクロな世界をつなぐ知恵

山本●そういった子どもの根源的な感覚や感情に、大人はどう向き合えばよいのでしょうか。

杉本●例えば、乳幼児の「分離不安（登園時に親と離れて泣く姿）」があります。これを単に「新しい環境や先生に慣れないから」と言い換えてしまいがちですが、本質はもっと根源

的な「離れることへの不安」だと思っています。そして、その不安をあやし、新たな関係を結び直す営みこそが保育の魅力です。子どもが泣いている姿を「美しい、尊い」と捉える感受性が、保育者には必要ではないでしょうか。大好きな人がいるからこそ分離不安で泣くわけであり、そこには豊かな思いやりや共感の窓口があります。一成さんのアプローチの素晴らしいところは、この「目の前の子どもをあやす」というミクロな実践が、実は「地球規模の環境問題」や「恒久平和」といったマクロな課題と地続きであると教えてくれる点です。

山本 ●実践を見てみると、子ども同士や子どもと大人のあいだで「関係が結ばれていく」瞬間が本場にたくさんあります。私はそれを研究報告書の中で「関係の発酵」と表現しました。関係というのは、無理やり結ばうとしても結べるものではありません。しかし、子どもが「くっつきたい」と感じた時には自然と近づいていくし、その動きを支える「場」が確かに存在しています。現場では日常の一コマにすぎないように見えても、その関係を紡ぐ実践には大きな意味があります。

今、世界ではさまざまな分断が問題になっています。考え方の違う人同士の分断、人間と自然の分断など、つながりが失われている状況が多く見られます。そうした分断をどうすればもう一度つなぎ直すことができるのか。そのヒン

トや知恵が、実は保育の実践の中にあると私は思っています。

『希望の保育指針』のリーフレット（本誌2026年3月号付録）を作成した時にも、子どもが「ゆらぎながら育つ」プロセスこそが民主主義につながるという視点を盛り込みました。人はそれぞれに違うリズムを持っています。同じ「生きているもの」として共通のリズムも持っています。子どもも保育者も、それぞれがゆらぎながら、ともに過ごす中で相手のリズムも感じて、試行錯誤しながら関係を育んでいきます。その営みは、社会の中で多様な人々がともに生きるための基盤そのものです。保育は単なる子どものお世話ではなく、さまざまな分断を乗り越え、関係をつなぎ直す、とても重要な営みだと思っています。

今回の本のテーマは「アニミズム」なんです。簡単に言うと「何でも生きているように感じる心」で、子どもだけでなく世界中の先住民の人々をはじめ、多様な人々たちで見られる心です。これまでの心理学や人類学では「幼稚な心」とか「幻覚」とか言われて、あまり真剣に扱われてこなかったのですが、今はその姿勢を反省して、むしろ現代の人間のあり方を見直すうえで学び多きものとして、真剣に受け取る流れが出てきています。

私が保育者をすごいと思うのは、まさにその子どもの世界を真剣に受け取る「姿勢」です。

尊重するし、一緒に楽しむ。保育って、そういうところから始まっていることが多いと感じています。

そして保育では、そのように子どもから学ぶことと同時に、大人の知恵を混ぜ合わせることもしています。これは本の最後にも書いた私の育児のエピソードなのですが、娘が朝ごはんのバナナを「バナナちゃん」と呼んで、一緒に歌を歌いながら遊んでいたことがありました。私はアニミズムが好きなので、ついついやりすぎてしまつて「目を描いてあげようか」と言つて、油性のフェルトペンで描いてしまったんです。娘は大喜びしましたが、今度は可愛すぎて捨てられなくなり、最後には泣き出してしまいました。

島本 ●それは胸が痛みますね。

山本 ●私はうしろめたくて、どうしようか悩んだ末に、家に発酵中のコンポストがあつたので、「バナナちゃん、コンポストに入れる？」と提案したところ、娘はぱつと笑顔になって、「バナナちゃん、お野菜の栄養になるかな？」と言ってくれたんですね。その瞬間、救われた気がしました。

この出来事を通して、子どもの世界と大人の知恵が行き来しながら、お互いの世界を知り合っていくプロセスとして保育を考えるようになりしました。大人が一方的に命の大切さを教えたり、能力をつけるためのプログラムを提供す

るのではなく、子どもの世界を真剣に受け取りつつ、大人の知恵も働かせることが大事なのだと思っています。

島本●娘さんの中で、バナナの命が「終わり」ではなくて「つながる」という感覚が生まれたのだと感じました。大人はすぐに区切ってしまうがちですが、子どもは自然に次の命へとつなげていくところがありますよね。

泣いている子どもを「泣きやませること」だけ考えると、泣いている理由を見失ってしまいます。でも理由がわかると、子どもは納得して落ち着くことがある。そういうつながりを大事にする感性って、保育者がもともと持っているものだと思います。

杉本さんは、そういう感性をどう磨いていらっしゃるのでしょうか。

杉本●泣いている子どもの心って、本当に美しいと思うんです。困ったこととして見るのではなく、まなざしが変わると尊いものとして受け取れるようになる。娘さんがバナナを捨てられなかったのも、価値を感じていたからです。

保育の現場では、子どもが価値を持っているかもしれないものを大人が「ゴミ」と判断できず、保育室がダンボールや素材でいっぱいになることがあります。どれがゴミかわからないんです。そこで最近は「中継地点」をつくり、一度そこに集めて、コンポストのように循環させる工夫をしています。水に混ぜたり、接着剤で

固めたりして別の素材に変えて、また遊びに使うんです。

こうした循環を生み出す環境づくりは、保育の面白さであり深さでもあります。子どもの世界と大人の知恵が混ざり合い、発酵するように新しい価値が生まれていく。私は、泣くことが尊いと感じるのは、自分の中にも同じ感情があるからだと思っています。悲しい思い出にも価値があるし、分離の不安は好きな人がいるからこそ生まれる。共感と道徳の根本で、共感力が高まれば関係性が豊かになる。一成さんのアニメズムの視点は、そうした根源的な感覚と響き合っていて、保育の尊さをより深く感じさせてくれるんです。

これからの展望

島本●最後に、今回の受賞を踏まえて、これからの展望や社会へ伝えたいメッセージ、あるいは選考委員の先生方からのフィードバックについてお聞かせください。

杉本●今の時代、小学校に入学するまでに「遊び込む」こと、そして「生命の根本」に触れる営みが本当に大切です。一成さんの紡いでくれた言葉は、日々の地道な保育がいかに尊いものであるか、保育者の魂を肯定してくれました。この喜びを糧に、これからも「ひびくまざるわきだす」保育を伝えていきたいですね。

山本●私の専門である「教育人間学」の視点から見ても、今、世界中で「人間とは何か」という問いにみんなが困惑しています。AIの台頭や気候変動の中で、これからの教育や生き方はどうあるべきか。その答えを、実は子どもたちが保育の現場で教えてくれています。あらゆる生き物や環境と対等に、仲間として暮らしをつくっていく子どもの姿の中にこそ、これからの社会のヒントがあります。幼児教育・保育という専門的な営みが、どれほど重要な役割を果たしているか、研究の立場からもしっかり社会へ発信していきたいと思っています。

また、選考に関わってくださった佐伯胖先生（東京大学名誉教授）が以前書かれていた「自分の問いを探索した論文には面白さを感じる」という言葉にも非常に励まされました。私自身、自分が保育した経験や子育ての中のトラブルなど、本当に「自分の問い」からしか出発していない研究でしたので、今回評価していただけたことは本当に嬉しかったです。

島本●「どうして子どもは、こんなことをしたんだろう？」という自分自身の問いを持ち続けることこそが、明日の保育へのエネルギーになるのだと、今日のお話から改めて強く感じました。現場の価値を専門的な知見で可視化していくお二人のご活躍を、これからも応援していきたいと思っています。

本日は、ありがとうございました。